

修士論文（要旨）

2014年1月

中国の黒龍江省における日本語学校の会話授業への提案  
— ロールプレイを中心として —

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

212J3009

高 宇

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	ロールプレイとは	3
2.2	ロールプレイのねらい	3
2.3	会話授業におけるロールプレイの応用	3
2.4	本研究の位置づけ	5
第3章	黒龍江省における日本語学校	6
3.1	中国の北方地域と南方地域について	6
3.2	日本語学校の現状	7
3.3	日本語学校の会話授業	9
第4章	調査概要	12
4.1	調査協力者	12
4.2	調査方法	14
4.3	分析方法	14
第5章	学習者に関わる分析	15
5.1	学習者の学習ニーズに関わる分析	15
5.2	学習者が求める会話授業	30
5.3	結果のまとめ	38
第6章	教師に関わる分析	39
6.1	学習者の学習ニーズの認識	39
6.2	ロールプレイについての認識	44
6.3	現在会話授業の問題点	50
6.4	結果のまとめ	55
第7章	会話授業の問題点に対する提案	56
7.1	会話授業の目的を明確化する	56
7.2	ロールプレイの手順	57
第8章	まとめと今後の課題	67
参考文献		I
添付資料 1		①
添付資料 2		②
添付資料 3		⑭

## 要旨

中国において、日本語非母語話者教師（NNT）が特に問題意識を抱えていると思われるのが、中級以上のレベルの学習者に対する会話指導である。中国人日本語学習者が中国で日本人との接触や、生の日本語を取り入れる機会は限られている。そのため、授業中に会話力を伸ばす活動が求められている。会話授業でよく使われる練習方法はロールプレイであるが、従来の授業で使われているロールプレイは話す練習のために、学習者の「自己表現」が重視されていないという問題がある。会話授業で扱うロールプレイには、それを教室で行う場合は、教師が学習者による身振りや手振りをつけた発話の様子をその場で直接確認できるという利点がある。また、多くの中国人学習者は授業中に主体的に発言することが少ないという特徴があるので、ロールプレイによって会話らしい振るまいが楽しめる雰囲気の中で学習者に会話を体験させることがコミュニケーション能力の養成に役に立つと思われる。

本研究は中国の黒龍江省における日本語学校の日本語教師と日本語学習者を研究対象として、学習者のニーズと学習者に望まれる会話授業のあり方を解明し、会話授業を改善するための実行可能な授業案を提案する。

調査結果と会話授業への提案は以下のようにまとめられる。

学習者は日本語能力試験合格と日本語によるコミュニケーション能力を身につけることを目標とすることがわかった。実際の授業活動では、教師は学習者のニーズを把握することができるが、会話授業では、教師は主導権を持っており、授業を行っていることで、いくつかの問題点が見られた。まず、学習者が体験したロールプレイは機械的な練習になり、言語運用能力を身につけることが難しいという。また、学習者が会話授業で練習する時、持っている言語知識を使用する意識がないという問題である。

以上の問題点を解決するため、ロールプレイを導入する会話授業への改善案を提案した。提案は実際の授業で扱うロールプレイの手順を検討した。主に、ロールプレイの作成から、実施までを四つの段階に大きく分けて説明したい。まずはロールプレイ導入までのウォームアップについて提案し、次に、ロールカードの使用、ロールプレイの作成案を提案した。最後に、実際にロールプレイを実施する際にどのような形で行えばよいかと、どのようなフィードバックを与えればよいかということを論じた。本研究の日本語学校において、従来の会話授業では、ロールプレイの位置づけを明確にしていなかったし、ロールプレイの実際運用が重視されていないと思う。今後の課題としては、それぞれの現実状況を基にし、ロールプレイの活用状況を観察し、ロールプレイが適切に授業に取り入れられる実施方法を検討すべきであると考えている。

実践的コミュニケーション能力をつけることが現在の日本語教育の目標である。そして、このような能力が学習者にとっては、社会で生きる力になると思う。しかし、稿者自身のロールプレイ使用の経験が限られているため、提案してきたロールプレイ活動は完璧なものではないと思う。今後、実践をしながら、修正を加え、改善していく必要があると考える。本研究のような日本語学校の会話授業に、提案したロールプレイを取り入れるのは、一朝一夕に成し遂げられるものではないかもしれないが、できることから少しずつ始めて

みることが重要ではないだろうか。授業参加者の教師と学習者がそれぞれの責任を持ち、積極的にロールプレイに参加すべきである。教師と学習者がロールプレイを行う際に、違うと思われることを修正し、実践的コミュニケーション能力が育成できる授業を実現するように努める必要がある。さらに、現実には、学習者母語としての中国語で話す時、自分の「思い」を伝えられず悔しい思いをした経験、本来の意図と違って伝わって誤解された経験があるはずである。教師がロールプレイなどの教室活動を行う際に、学習者の日本語コミュニケーションにおける失敗の例を回避するのではなく、それを乗り越えるため、失敗の理由を学習者と検討し、学習者が自分の考えを論理的に述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりすることができるように指導することが必要だと思う。

また、ロールプレイという活動はすべての学習者に受け入れられるものではなく、実際にロールプレイに興味がない学習者もいる。教育の分野では学習者の立場を大切にし、学習者の精神面にまで配慮する必要があることが唱えられている。日本語学習者の多様性の実態に迫るためには、一人一人の学習者の学習過程を丹念に見ていく必要がある。会話教育実践の中の授業活動も、それぞれ異なる特徴があるため、授業活動の多様性と学習者の特性を考慮に入れた授業活動デザインが必要である。そして、教室外と教室内の社会に学習者が進んで参加できるようになるための支援を今後の課題としたい。

## 参考文献

- 伊藤とく美 (1999) 「テストとしての応用例－日本語学校で」『月刊日本語』12 (10), 54-57
- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化－非対称的参加から対称的参加へ－」『世界の日本語教育』15, 135-151
- 大森雅美・鴻野豊子 (2012) 『日本語教師の7つ道具シリーズ1 授業の作り方 Q&A78 編』アルク
- 岡田安代 (1992) 「コミュニケーション能力開発のための談話分析と教育－会話の進め方の型に関する視点の導入について－」『日本語論究1 言語学とその周辺』和泉書院, 227-237
- 河野俊之 (2003) 『TEACH JAPANESE(第2版)』凡人社
- キィ・ティダー (2005) 「相手と親しくなるための表現展開に関する一考察－日本語学習者のコミュニケーション能力向上のために－」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』18, 91-115
- 小池真理 (2004) 「学習者が期待する教師の役割：半構造化インタビューの結果から」『北海道大学留学センター紀要』8, 99-108
- 黄潔・林伸一 (2013) 「日本語会話練習のためのロール・プレイについて－構成的グループ・エンカウターの応用－」『山口国文』36, 64-82
- 徐一平 (2013) 「シリーズ 海外の日本語教育事情⑭ 中国における日本語教育の特徴と課題 中国における日本語教育の現状報告 2012」『文部科学教育通信』No. 318, 20-21
- 細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすか』明石書店
- 細川英雄・牛窪隆太・武一美・津村(田中) 奈央・橋本弘美・星野百合子 (2007) 『考えるための日本語【実践篇】－総合活動型コミュニケーション能力育成のために』明石書店
- 堀井恵子・西川寛之・西部由佳 (2010) 「ロールプレイカード・プロジェクト (RPCP) 活動内容」『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』
- 山内博之 (1994) 「日本語中級クラスにおける新しいロールプレイ学習の試み」『岡山大学文学部紀要』第 21 号, 101-116, 岡山大学文学部
- 山内博之 (1999) 「タスク先行型ロールプレイの実践方法について」『岡山大学文学部紀要』32, 107-116 岡山大学文学部
- 山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アルク
- 山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法－話す能力を高めるために－』ひつじ書房
- 山内博之 (2009) 『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 山本千津子 (2006) 「日本語の待遇表現教育における『自己表現』学習の意義」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』19, 151-178
- 横溝紳一郎 (1997 [2003 オンデマンド版]) 『日本語の教え方・実践マニュアル ドリルの鉄人 コミュニカティブなドリルからロールプレイへ』アルク
- 李彦娜 (2009) 「日本語教育におけるマルチメディアの活用－学生のコミュニケーション能力を育成するために」『北陸大学紀要』第 33 号, 161-172
- 林逸菁 (2007) 「日本語教育における学習者の調整行動と教室活動－総合活動型におけるレベルに差がある学習者間のインターアクション分析を通して」『早稲田大学日本語教育研究』93-104